２　亀岡あゆみデイサービスセンター

(1)　実施状況

①　小グループ活動の背景・全体像

当施設は、カフェテリアプランモデル事業実施前の１ヶ月前より(平成17年10月～)個別ケアを目的に、サービス内容の変更をしていた。来所して頂いた時に原則ご自身で、１日の予定を選択(活動内容・入浴・喫茶)していただいている。

このため、倶楽部活動以外は小グループを固定化できない状況にある。

また、行事や外出時以外は、集団的なアクティビティは実施していない。

〔1日のサービス内容〕

時　　間	内　　容
８：３０～	お迎え
９：００～	健康チェック
９：３０～	入浴(一般入浴・機械入浴)・選択活動（小グループ活動）
１１：４５～	朝の会・口腔体操など
１２：００～	昼食
１２：４５～	休憩・静養・健康チェック
１３：１５～	入浴（一般入浴）
１３：４５～	選択活動（小グループ活動）
１５：００～	喫茶・おやつ
１５：３０～	ウォークラリー（歩行訓練）
１５：４５～	終わりの会（体操）
１６：００～	お送り

〔曜日毎の倶楽部活動内容〕

曜日	月	火	水	木	金	土	日
倶楽部活動	陶芸	書道			木工		
選択活動	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択	カラオケ テレビゲーム ものづくり ゲーム活動・健康 その他選択

※　「ゲーム活動・健康」：施設が企画するゲームや体操など。

※　「その他選択」：読書、塗り絵、何もしないなど。

②　具体的な小グループ活動の内容について

ⅰ）　木工倶楽部（物品作成等グループ）

○　活動の概略

工房を開業されているボランティアが２名廃材を利用し、木工製品を創作する。

（毎週金曜日、参加者８名程度）

○　長期目標

「法人主催のお祭り（バザー）に提供できる作品を作り、達成感を味わう。」

○　活動の成果・評価

当初、男性向けの活動が無いものかと模索中に、木工芸の会社を営む方に依頼し（ボランティア）企画した。しかし、当方の期待とは裏腹に参加希望者の９割が女性であり、設定していた男性の殆どの方は、単発の参加に留まった。

女性の参加者が多数を占めていたことから釘や金槌を使用することで怪我や事故を憂慮していたが、ボランティアの指導に従い、器用に作業をこなされていたように感じる。

また、初めのころは個々に集中されていたが、回を重ねるごとに周りと会話や相談なさる光景をよく目にする機会が増したようであり、継続してほしい希望（意見）も多い。

ただし、形造り（大まかな形）は出来ているが、細かな作業（研磨、加工）については、人的補助も含めバザーに展示できるほどの製品としては課題が残る。

ただ、他の活動や場所で使用するもの（書道の道具入れ、併設施設の棚、加湿器の台など）を積極的に製作して頂き活動意欲を高める工夫をしている。

ⅱ）　書道倶楽部（物品作成等グループ））

○　活動の概略

ボランティア（１名）が月１回指導にくる。教材は希望者が購入。（施設で準備）

（毎週火曜日、参加者８名程度）

○　長期目標

「隣接保育園の卒園式で卒園児の名簿（掲示用）を作成する。」

○　活動の成果・評価

以前より書道はレクリエーションで取り組んだことはあったが、正直人気のあった活動ではなかった。しかし、小グループ化することにより希望者が多く、継続して取り組む姿に驚かされた。

また、書道の道具にしても当初施設で準備していたものでは練習にならないとの意見が多く、費用が掛かっても準備してほしいと希望されたり、ご自分で購入されたりなかには自宅用とデイ用の二つを購入される方まで現れ、筆を持つ喜びを感じることや、継続意欲が強いことが見て取れた。

実際に書道を希望される方は、経験者が多く達筆の方が多い中、書初めを施設に掲示すると提案すると、それ以上の力を発揮され、ご自身が納得いく作品の製作に集中されていた。

また、ボランティアに手直してもらったものを、喜んで持って帰って練習したり、目標の卒園式まではまだ時間的な余裕があるが、園児が読めるようひらがなにすることや、ボランティアに前もってお手本を準備することを頼むなど積極的な姿勢が見えた。

iii）　陶芸倶楽部（物品作成等グループ）

○　活動の概略

ボランティア(陶芸家１名・絵付け指導１名)の指導の元、二週でひとつの作品を制作するペースで活動。(毎週月曜日、参加者８名程度)

○　長期目標

「施設で使用する陶器の作成と展示会の開催。」

○　活動の成果・評価

ボランティアの陶芸家の指導で取り組み始め、一週目に形造り、二週目に絵付けの作業ペースで進む、当初、デイでは湯飲みや箸置きの製作を希望していたが、先生のアドバイスもあり小皿造りを何度も繰り返し、作業工程や絵付け

に慣れることから始めた。土に触れることが初めてであった利用者(認知症者も含む)が、回数を重ねる毎に土の扱いに慣れ、一度参加されるとほとんどの方が継続されることがよく判った。

当初、作業中は集中されておられたこともあり会話が弾まなかったが、作品が出来る度に互いの作品で感想を述べ合う光景をよく見かけた。また、いつも参加される方が休み等で姿が無いと気遣うことも増加したように感じる。

絵付けに関しては、当初先生や職員に書いてほしいと依頼されるケースが多かったが、徐々に促すことによってご自身で取り組まれることも増える。なかには次週までに下書きやデッサンをして来られたり、デザイン画の本を持参されたり、型造り用のボールを積極的に準備されることも大きな変化である。(家で同じことをされなくても、今度行くときは『こうしよう。ああしよう。』『一輪差しを作りたい。』などと思いを巡らせる姿や話を聞く機会が多くあったことが変化と言えよう。)

また、完成した作品を施設でしばらく展示すると、違う曜日の利用者からも参加のために利用曜日変更や追加の要望があった。(午前中休みでも昼から家族に送ってもらい参加をする方もおられた。)

目標に対する評価としては、導入段階なので、直ぐに結果が伴わないが、今後の期待は大きい。

ⅳ) カラオケ倶楽部

○ 活動の概略

人気の活動であり、希望者も多いため毎日行う。(毎日、５名～12名)

○ 長期目標

「誰もが大きな声を出して楽しく、リズムよく唄う。(発表会の開催)」

○ 活動の成果・評価

活動当初マイクを持って歌われる方は少数であったが、慣れて来られるうちにマイクに抵抗無く歌われる方が増える。(『私は聞くだけ。』と言っておられた方が、しばらくすると自然にマイクを持って歌われることが増える。)

また、声が出しにくい方やよだれが目立つ方が毎回参加されるようになり、症状が改善されたようであるとの職員の意見も増加した。

（言語療法になっているのか？）

クリスマス忘年会（職員対抗紅白歌合戦）に併せ、カラオケ倶楽部に参加される方に、歌や歌手リクエストと歌合戦の参加を呼びかけた結果、例年以上の参加希望者と盛り上がりを見せた。今まで、大勢の前で歌わなかった方が小グループという場を通して歌を歌うことによって自信を持たれて来たことは大きな変化である。（歌本や歌詞本を購入され、持参される方も居られた。）

しかし、曜日によってはカラオケを希望される方が少ないため、毎回歌われる方が同じという日もある。また、『とりあえずカラオケでも行こうか。』と、やりたいことがないから参加するとおっしゃる方がいたのも事実である。（課題）

全体的に『カラオケ倶楽部』を食堂で開催するようになり、利用者が施設内を移動することに抵抗が無くなったように感じる。また、曜日毎にカラオケ参加者が馴染みの関係をより深め、誘い合って参加される姿や、互いの『十八番』を全員で歌われることも目立つ。

ｖ） テレビゲーム倶楽部（ゲーム機器等活用グループ）

○ 活動の概略

テレビに接続して実際に体を動かし、ボウリング、ゴルフが体感できる健康器具（Xavix・ザビックス(新世代(株))を使用し活動する。（毎日、３名～10名）

○ 長期目標

「ゲームのルール、機械の使用方法を理解する。」

○ 活動の成果・評価

ザビックスの活用を半信半疑で導入したが、利用者にとっては目新しく楽しい物に写ったようである。

当初は、ゲームのルールやシステムの操作方法に戸惑われていたが、理解された時点から楽しくなられたようである。また、慣れて来られると、より上手く、より高得点を目指される方が増加した。意欲の向上と共に集中力も増し、他の利用者の一挙手一投足に歓喜される姿がよく見受けられた。また、横になって休憩していた方が、時間になると自然に起きて下さる姿が見られた。

しかし、経験や知識が多少あるか、操作が簡単な(スピード)ソフトに限られることは否めない。今後高齢者向け（対象）のソフトが出来れば可能性は広がる。（例：ゲートボール）

目標に対する評価としては、利用者の方で

もルールの理解、操作方法の把握は個人差はあるが、充分克服できるものと認識できる。

また、賛否はあろうが認知症高齢者で徘徊等があった方が落ち着いて継続されることも見逃せない発見点であろう。

ただ、得てして介護職員は同じことをしていただく事に、罪悪感を持ってしまうものなのか、違うことをさせようと苦慮することが多い。

vi） ゲーム活動・健康倶楽部

○ 活動の概略

施設が提案(企画)してレクリエーションや健康体操を実施。

（毎日、５名～10名）

○ 長期目標

「活動を通して健康に対する興味・関心を広げ、心身機能の向上を図る。」

○ 活動の成果・評価

以前より施設が企画するゲームや体操を希望される利用者を対象に行っているが、元来体を動かす事が好きな方が希望されるケースが多い。そのため、日頃より健康に気を遣われている方が選択されることは無駄ではないが本来、自立支援の取り組みとしては、対象者が違うように感じる。

また、目標設定の点で個人的な継続性に欠けることから、今後としては活動内容について例えばひとつの競技(ゲートボールなど)や体操(バランスボールなど)を設定していくことが課題である。

ただ、人材的、物理的なハードルも高いと言える。

vii） ものづくり倶楽部

○ 活動の概略

季節の素材、(旬)話題、懐かしい物などを織り交ぜ施設が企画した制作活動。(草鞋作り、干し柿作り、手芸など)（週２，３日、５名～10名）

○ 長期目標

「懐かしい物に触れ、創作することによって生きがいを見つける。」

○ 活動の成果・評価

最初に取り組んだものは、『草鞋作り』である。地元の稲刈りで出た稲を使用し、稲を叩き、編み始めた。当初(ボランティア)指導して頂く方を探したが、該当者がなく、参加者で試行錯誤しながら完成させることが出来き、その内に自宅で布を使って編まれる方が居られ、ひ孫にほめられたことが嬉しく、会話が弾んだと介護者よりご意見を伺うことが出来た。

次に、渋柿を使った干し柿造りに挑んだ。当初職員からも包丁を使用することに難色を示す者もいたが、始めて直ぐに要らぬ心配であったことに気づかされた。120～130個あった柿が２，３日で完成し、おやつで食べ、『来年はもっと作ろう。』『甘くておいしい。』など話が咲いた。

他に、万華鏡作り、編物(手袋、コースター、タワシ)などがあった。

今後は、作って終わりではなく、違った物や形に波及できたらと考える。また、地域の資源を活用した地場産業的な（郷土物産）物にまで発したいと夢をもってて取り組んで行きたい。

③　職員の業務について

○　今回のモデル事業を取り組むにあたっては、常勤職員・非常勤職員に関係なく直接処遇対象職員に対し、必ず３～８名程度の利用者を担当制とした。これは、事業の内容の周知以上に目標の達成には常勤・非常勤に関係なく全員で連携し取り組まなければ、絵に描いた餅であるとこれまでの経験で認識していた為である。

活動内容の企画については、職員を二班(活動系・製作系)に分けそれぞれプログラムの企画を提案し、ミーティングによって決定し、計画、準備、実行へと移した。

目標設定についても、最初は担当職員の判断で設定し、事業実施１ヶ月後再設定することで、実行可能なものに修正を行った。

○　個々のニーズや目標の把握を周知させ、実際に関われるように、毎日の個人記録に長期目標・短期目標、希望活動を記入し、誰が見ても同じ対応が継続して行える工夫をした。（下記参照）

【個別活動記録】（イメージ）

氏名） 希望活動） 長期目標）　　短期目標）				
曜日	参加活動	考察	今後の対応	記入者

また、個人記録も前日に当日分を準備し、当日の出勤者が各グループを確認、把握できるよう対応した。

ただ、実際には事業導入までの準備期間が短かったため、充分職員全員が認識していたか疑問が残る。また、利用者や介護者についても充分説明出来なかったため、目標を設定しても本人が認識していない中での活動に無理があったことも否めない。（認知症者が混在している現状も要因）

記録、把握に関しても職員同士の情報の共有の問題、記録方法の統一についても課題が残る。また、最も重要な目標に対する意図的な関わりを、３ヶ月間でマスターすることには正直不十分であったと認識している。ただ、潜在意識的に個別ケアの重要性、今後課題がまだまだあることをそれぞれが認識できたことは収穫であったのではないだろうか。

評価の点についても全職員が情報を共有することが必要であるが、全員で個別活動の評価だけをすることは物理的に無理が生じるため、カンファレンス等の機会を活用し実施することが現実的だと考える。ただ現状では、個々のケースについて充分検討できていない為、今後当施設においても充分精査し、検証して行きたい。

○　ボランティアの受け入れ体制や連携についても、当初職員によって対応が異なったり、準備が不十分であったため、ボランティアより苦情や不満が出ていた。しかし、ボランティアと職員間の人間関係や施設の雰囲気や流れを理解され始めると自然な活動になってきたと言える。しかし、ボランティアを受け入れる当施設側の考えや体制を十分理解していただくこと、また、職員自身もボランティアに活動しやすい雰囲気や環境を提供することが重要だと感じた。

また、モデル事業を通して、元気高齢者ボランティアの活用以前に地域との関係が不十分であると、改めて認識したことも課題ではあるが、収穫でもあると言えよう。

余談であるが、当施設のようにモデル事業を受託してからボランティアを探しても上手くいかない。日頃より地域と拘わり、根ざしていないと返って問題を生じる。地元のボランティアを自法人で育成することも大きな課題と感じる。

(2)　今回の事業に対する思い・感想

○　以前より多人数の活動に疑問や課題を感じながら、如何にサービスの質の向上に取り組むべきか模索中に、今回のカフェテリアプランモデル事業の案内を頂いた。

前述したようにカフェテリアプランモデル事業に取り組む以前より、多人数の処遇に疑問と不安を抱えていた。設立当初は、１日の利用者数が５人～10程度であったものが、数年も経たずに１日の平均利用者数が約31名（定員35名）になることで、利用者も職員も消化不良のような何か物足りないものを抱えながら、サービスを提供していた。

当初、少人数で盛り上がったレクリエーションも人数が増えることによって盛り上がりに欠けてくる。また、参加したい方もそうでない方もいっしょにすることで、利用者も職員

もストレスが掛かり、義務的なものになってしまっていたのが現状だった。

そこで、サービス内容（活動・入浴）についてのアンケート調査を実施し、その調査結果を基に活動と入浴について選択できるよう試行しようと考えた。

独自の試行期間が１ヶ月経過した頃よりモデル事業を開始したのであるが、実際モデル事業開始以前より、ご利用者様の変化を現場の職員自身が気付き始めていたのだと感じる。ただ、当時は具体的な記録やデータ等がなく、それぞれの介護者が肌で感じたり、直接個々に声を聞いたりしていただけである。また、今から思えば介護者自身も変化しつつあったように感じる。

実際にモデル事業を開始するにあたり現状のグループ活動を継続するかどうかの会議では、グループ活動、個別ケアに対して異を唱えるものは居らず、逆に改善点や課題点を指摘する声が多数を占めた。ただ、モデル事業の記録に対する不安や負担を気にするものが圧倒的に多く聞こえた。しかし、当初は記録に戸惑い残業が増えたが、時間が経つにつれ業務内に終えるように慣れてきた。

○　いざ事業実施すると、予想以上の反応が返って来たと言える。

まず、利用者の意欲の向上が顕著に現れ始める。開所以来、手を替え品を替え利用者の要望や、意見を聞く機会を設けてきたつもりでいたが、今から思えば『利用者の手足を縛りながら、なにかしたいことないですか？』と尋ねていたのだと感じる。何もさせず、選べるもののなく、答えだけを要求していたのだと反省した。

実際に提案し、一緒に考え、取り組めばたくさんの意見や要望が自然とあふれて来た。『今度はこんな事をしてほしい。』『私はこんな事ができる(やりたい)。』、もっと意欲的な方は家で陶芸のデッサンを書き準備し、家で書道を練習し始め、ある方は孫に誉められたからもっとしたいと言われ・・・。以前は昼食時に食堂へ移動を嫌がられていた方が、『さあ、カラオケしに行こう。』と、今では職員も利用者も施設内を移動することを当たり前のように感じている。

○　次に教えて頂いたのは、ご利用者個々の残存能力の発掘ができたことである。小グループ活動のお陰で、職員も利用者と個別に触れ合う機会を通して今まで発見できなかったり、見えなかった能力を気付くことが出来たのである。軽度利用者のその潜在能力の高さ、認知症、重度利用者の可能性の高さに正直驚き、『高齢者は何もできないと感じていたのは、家族(介護者)でもない、まさに高齢者福祉施設に勤める我々自身であった』と気付かされた。

このことから、介護という名のもとに手出ししないでよいところに手出しし、必要なところに手を差し伸べなかったのだろう。本来の自立支援は利用者の持っている能力や意欲を引き出すお手伝いをすることが我々の仕事である。身体的な(食事、排泄、入浴等)目先の仕事を毎日こなすことがいつの間にか染み付いてしまったのであろうか？

○　また、今後より充実し継続するためには、地域やボランティアの存在は不可欠である。当施設においても、今回ボランティア探しに最後まで苦労をしたし、また、今までの当施設

の地域の関わりの浅さに思い知らされた。やはり、地域との交流やボランティアの充実は長年培われた上で、初めて機能し得るものだと。

今回元気高齢者(ボランティア)の活用が事業のポイントでもあったが、当施設では実績がなかった。確かに、当初は積極的に探して募集し、なかなか見つからなかったのも事実だが、ただ、探していく中で、誰でもよいのではなく、ある程度、知識(例：認知症)をもった方でないといけないこと。また、地域の方々もそれを感じ、ボランティアの前にいろいろ教えてほしい。そういう機会を作ってほしいという意見が多かった。これは大きい課題のひとつと言える。

また、『地域に根ざす』と言いながら、実際どのようにするのかも重要な課題のひとつであるが、これに関しては、グループ活動を通して期待できる可能性(副産物)が大いにあるだろう。

それは、グループ活動を継続、充実し、ボランティアを巻き込みながら、地域へと自然とかかわりを持たすことによって、亀岡らしい、俺(おら)がまち(篠町)独自の活動になることは疑う余地もない。

○　最後に今回の事業を通して、小グループ活動が全ての利用者に有効でなかったことも述べておく必要がある。それは、変化が予想以上に見られ意欲が向上した方が多いのも確かだが、ごく少人数ではあるが小グループ活動に馴染まない、馴染めない方が未だにいることも否定できない。

これは、本人の性格などの問題もあると考えられるが、長期的な課題、目標と言えよう。